

逸脱した発話音声に対する記号的な解釈の可能性 —母音の延伸を中心に— Can Deviation of Speech Voice Be Thought of as Sign? —The Case of Vowel Lengthening—

韓 旻池[†]

Minji Han

[†]京都大学院生

Kyoto University

han.minji.53s@st.kyoto-u.ac.jp

概要

日常のコミュニケーションでは、アナウンサーがニュース原稿を読み上げるような標準的な発話音声から逸脱した発話音声が見られる。本発表は、逸脱した「発話音声」とそこから聞き手が感じた「意味合い」の結合が、聴覚映像と概念の結合である「記号」と捉えられるのかを、現代日本語共通語の「母音の延伸」という題材に即して検討した。状況込みで母音の延伸という形式の対応物を観察した上で、概念の抽出を試みた。結論としては、本発表では、発話の場の諸要素をある程度排除した三つの意味を取り出し、逸脱した発話音声の記号的な解釈の可能性を示す。

キーワード: 発話音声, 非標準的な発話, 記号, 母音の延伸, 概念, 意味合い

1. はじめに

日常のコミュニケーションでは、アナウンサーがニュース原稿を読み上げるような「標準的」な発話音声から逸脱した形で発話がなされることもある¹。間違いには及ばないそれらの発話音声の逸脱は、逸脱とはいいいながら、無秩序なものでは基本的にない。母語話者はそこに意味的な何かを読み取れる。つまり、「標準的」な発話音声と同様、「逸脱」にも、対応する意味の存在が予想される。では、その逸脱した「音声(形式)」とそこから感じられる「意味合い」のカップリングを「記号」と考えるべきだろうか？

従来、言語は、「概念と聴覚映像の結合を記号と呼ぶ」という記号の定義に適い、記号として捉えられるとされてきた[1][2]。一方、音声に関しては、音声科学、特に感情音声と呼ばれる研究文脈で“attitudinal correlate”「言語社会によって違った意味合いを持つ」など、音声と意味合いの対応関係が明らかにされてきた[3][4][5]。しかし、このような音声パターンと意味合いの結びつきが記号かどうかを検討する試みは管見の限りあまり見られなかった(例外 [6])。

本発表では、現代日本語共通語の母音の延伸を具体的な題材として「逸脱した発話音声」が記号かどうかという問題に取り組む。ただし、例えば、語「ニュース」に含まれる2モーラの長音「ニュー」のような、語彙的に予定されている発音は「標準的」な発音として、考察対象から除く。以下、考察対象となる母音の延伸は「:」で表すが、片仮名に用いる長音記号のように1モーラという含意はない。なお、断りが無い限り、出された例は作例である。

2. 母音の延伸とそこから感じられる意味合いの結合は記号と呼べるか

本発表では、記号を「概念と聴覚映像の結合」と定義する。「母音の延伸」が「聴覚映像」に対応するとすれば、「母音の延伸から感じられる意味合い」は「母音の延伸の概念」として捉えられるだろうか？ 発表者の考えでは、この問題には「意味合い」と「概念」の違いが関わっている。

対話の中で聞き手が感じた意味合いは、発話の場の諸要素(状況、文脈、話し手や聞き手など)が関わって織り成したものである。しかし、例えば、概念上の《猫》が、発話の場の諸要素に左右されずに、いつ、どこで、誰が話しても、概念としてのイメージが揺れないように、「概念」は発話の場の諸要素からかけ離れているべきだと考えられる。したがって、母音の延伸を聞いて感じる意味合いは、発話の場の諸要素が関わり生じる意味なので、記号を成す「概念」と呼ぶにはふさわしくない。

そこで、発話の場の状況などを問わずに取り出せる意味があるのかどうかを考えるために、まず状況込みで母音の延伸という形式の対応物を観察する。

¹ 本発表では、健常者の場合のみを取り上げる。

3. 母音の延伸の概念上の意味

母音の延伸の実例から、聞き手が感じ取るような意味ではなく、発話の場を排除した意味が取り出せれば、その意味は概念と呼ぶにふさわしいはずであるという仮説に基づき、概念の抽出を試みた。

3.1. 方法

概念としての意味を抽出(または、特定)するために、言語記号の場合を参考にして、プロセスを立てた。図1は、言語記号の「木」を例に、概念としての意味を抽出するプロセスを簡略化して表したものである。

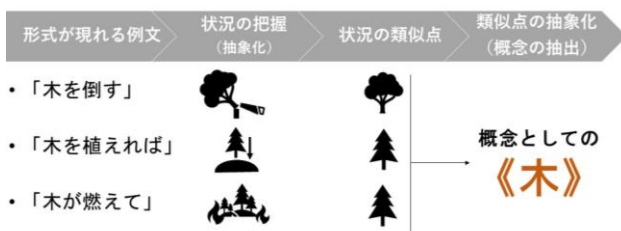


図1 言語記号の概念の抽出プロセス

まずは、問題の形式「き」が現れている例文を集める。そして、当該の例文がどのような状況であるのかを把握する。把握の際には、類似した例文の集まりを観察し、「どんな種類の木を、どんな道具を用いて、どうやって倒す」といった余分を省き、抽象化して状況を把握する。似たような方法で、状況を集めて、状況同士の類似点を見出す。そして、類似点をさらにまとめて抽象化して概念としての《木》を抽出する。この《木》という概念は、たとえ発話の場の諸要素によって違う意味として聞き手に受け入れられようとも、概念としては発話の場の諸要素に影響されない、揺れ動かない安定したイメージである。

このようなプロセスを、母音の延伸に適用した。まず、母音の延伸が現れた実例を集め、実例の類似性からいくつかの状況を把握した[7]。そして、状況のうち類似した傾向を見せるものをグループ化し、同時に発話の場の諸要素の影響を排除すべく、状況ごとに母音の延伸が現れた時「言葉の面がどのような状態にあるのか」を観察した。その結果、諸状況のうちの一部から、類似した状況であり、かつ言葉の面の状態も類似している三つのグループが取り出せた。次にそれらのグループを挙げる。

3.2. 結果

三つのグループは言葉の面でそれぞれ次のような特徴を持っている。

- (i) 発話されている言葉に話し手の主観が込められている
- (ii) 発話時点以降の言葉の聴覚映像がまだない
- (iii) 言葉に社会的な制約がかかっている

以下、それぞれについて説明する。

(i)「発話されている言葉に話し手の主観が込められている」とは、状況で言うと、強度強調や卓立強調されたと言われるものである。(1)と(2)は強度強調の例、(3)は卓立強調の例である。

- (1) (娘の絵を見て)「すご：い！」
- (2) (ステーキを食べて)「なんか肉：って感じ」
- (3) (佐藤が担当かと聞く友達に)「佐藤じゃなくて、た：か：ぎ」

強度強調の場合、発話されている言葉に「ことばの概念(の一部)に対して、その程度が強い」という話し手の主観が込められており、卓立強調の場合は、「相手に伝えたいような大事さだ」といった話し手の主観が込められている。

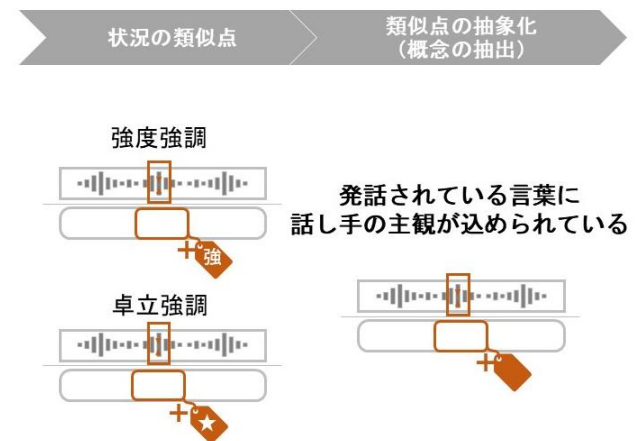


図2 (i)「発話されている言葉に話し手の主観が込められている」の言葉の面

(ii)「発話時点以降の言葉の聴覚映像がまだない」とは、状況で言うと、(4)のような言いたいことがあるがそれを指す聴覚映像が思い出せない時、(5)のような何があったか思い出せなくて次の言葉が言えない時、

(6)のように次の言葉を計算してまだ何も言えない時などである。

- (4) (動物園で見たエミューを考えながら)「動物園であれ見たんだよ. ほら小さいダチョウみたいなのエ:エ:ミュー!」
- (5) (昨日の帰宅後の状況を思い出しながら)「ご飯食べて, 本を読んだ後: なにしたっけ」
- (6) (「午後2時」と書いてある時計を見ながら)「次のミーティングは, 2時間後ですから, 十: 六時ですね」

母音の延伸を発話した時点で考えると, それぞれの理由は異なるが, 次の言葉の聴覚映像がまだないという点で共通している.

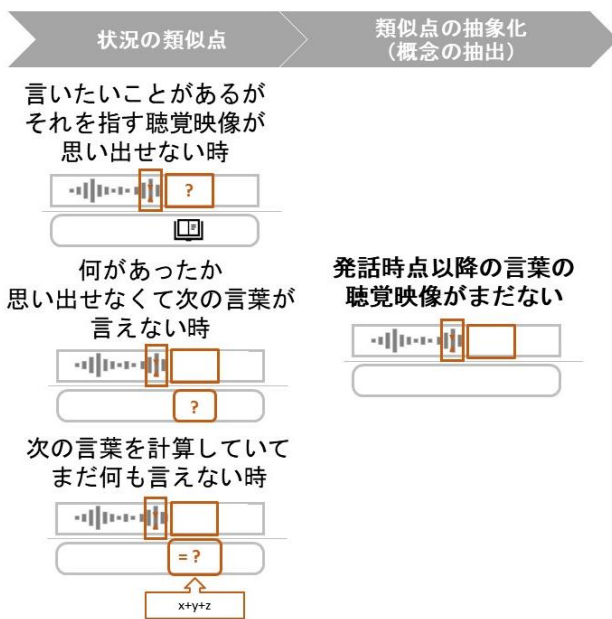


図3 (ii) 「発話時点以降の言葉の聴覚映像がまだない」の言葉の面

(iii) 「言葉に社会的な制約がかかっている」とは, 状況で言うと, 不確かな内容について話す時, 言ってはいけないことを言う時などである. (7)は前者の例, (8)は後者の例である.

- (7) (記憶の中の名前はあきらだが10年も前で自信がない)「となりの家はあ:きら君です. たぶん」
- (8) (テストで分からない問題が多かったと言う友だちに)「大丈夫だって. たとえ, まあ, 落:ちてもまた次の機会があるから」

前者にかかっている制約は, 「確かでもないことを相手に何の了承もなく言ってはいけない」という暗黙のうちの社会的な制約である. 後者の制約は「状況や文脈

に応じてこれらの内容は言ってはいけない」という暗黙のうちの社会的な制約である. 例えば, お見舞いで死に関することを話してはいけない, 受験前の人に落ちることを話してはいけないなどの社会的な制約である. 言葉に対するこれらの社会的な制約があるが, それでもためらいつつ言ってしまった際に, 母音の延伸が現れる.

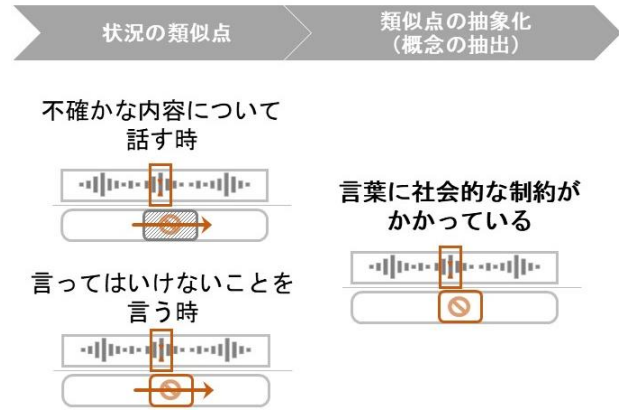


図4 (iii) 「言葉に社会的な制約がかかっている」の言葉の面

以下, ここで状況の類似点から抽象化して得たものを順番に意味 i, 意味 ii, 意味 iii と称して, 記号を構成するにふさわしい概念と捉えられるのかを考察する.

4. 考察

以上, 母音の延伸が現れた実例から, 母音の延伸が現れる状況的な偏りを把握して, それらの状況の間の類似性でグループを作り, 言葉の面を観察して言葉の面においても類似している三つのグループを確認した. そして, 言葉の面に注目することで, ある程度発話の場の諸要素が排除された形で抽象化して, 三つの意味を取り出した.

より具体的には, 状況から抽象化する過程で, 意味 i は「話し手の主観の具体的な内容」が, 意味 ii は「聴覚映像がない理由となる話し手の具体的な脳内状況」が, 意味 iii は「制約がかかる具体的な文脈, 状況」が抜けられた.

- 意味 i 「発話されている言葉に話し手の主観が込められている」
- 意味 ii 「発話時点以降の言葉の聴覚映像がまだない」
- 意味 iii 「言葉に社会的な制約がかかっている」

これらの三つの意味は、発話の文脈・状況・話し手や聞き手の具体的な状態などを含んでおらず、どんな理由で、どんな流れで、言葉がそのような状態になったかを含んでいない。発話の諸要素が取り出せた意味のようである。これを概念とするならば、聴覚映像と概念の結合が成立し、母音の延伸と概念のカップリングを記号と呼べるようになる。

しかしながら、母音の延伸の意味は、それ自体には発話の場の諸要素を含まないが、その前提に発話の場の要素を含んでしまうという限界があった。

まず、第一に、「今現在の発話の場において、発話される言葉がある」ことが前提されている。「今現在」というのは、言葉を最初に発話する頃を指す。例えば、昔の発話を再現して「あの時、ゆう君が「すご:い」って言ったけど」であれば、「すご:い」の今現在の発話の場は「あの時」になる。

意味 i は、今現在発話されている言葉がなければ、話し手の主観の込められるどころがなく、意味 ii は、次に来る聴覚映像がない、と発話が今現在進行中であることが前提である。意味 iii は、社会的な制約がかかる対象としての言葉が必要である。

第二に、「今現在の発話の場の諸要素」が前提されている。それぞれ具体的には次のようである。

- 意味 i : 発話されている言葉に対する、発話時の、話し手の心情や主観
- 意味 ii : 発話する言葉に対する、発話時の、話し手の脳内状況（記憶、思考、または言語的なプロセスなど）
- 意味 iii : 発話する言葉と、制約に関わる前後文脈・状況・場面、制約を制約と認識する主体としての話し手、社会的な状況を形成する聞き手

したがって、前提としての発話の場の諸要素を考慮すると、どの意味も発話の場の諸要素から完全にかき離れているとは言い難い。さらに、それぞれ関わった部分や数が違って、三つの意味のうちどれが最も発話の場の諸要素が排除できて、概念としての意味に近づいているのかも判断しにくい。

5. おわりに

日常のコミュニケーションにおいて、標準から離れた逸脱した音声があり、そこから意味合いが感じられることから、言語記号同様に、記号として捉えられるのかを、母音の延伸を具体的な題材にして考察した。

記号は概念と聴覚映像の結合だという定義と、概念は発話の場の諸要素に影響されるべきではないという前提の下、聞き手が感じた意味合いは発話の場の諸要素に影響されたため、概念と呼ぶにふさわしくないと判断した。

そこで、発話の場の状況などを問わずに取り出せる意味があるのかを考えるために、状況込みで母音の延伸という形式の対応物を観察して、類似した状況を言語の面に注目してまとめて抽象化し、三つの意味を取り出した。

これらの意味は、発話の場の諸要素または今現在の発話を前提にしているものの、前提以外では、発話の場の諸要素を多く排除している。完璧な排除ではないが、概念と言えそうな意味を母音の延伸に対応されたため、母音の延伸という逸脱した発話音声を記号として捉えられるという可能性を確認した。

本発表は、「逸脱した発話音声の記号的な解釈」という、従来あまり考えられていなかった考え方を提示し、その可能性を検討した。逸脱した発話音声の記号的な解釈は、音声言語だけでなく、文字言語における逸脱音声の表記に関する解釈にも寄与できることが予想される。なお、逸脱した発話音声は、今回題材にした日本語だけに限らず、世界の諸言語においても現れる現象であるため、通言語的または言語個別的特徴及び「言語」自体に関する新しい知見が得られることを期待している。

文献

- [1] Saussure, F., (1972) *Cours de linguistique générale*, Payot. (ソシュール, F., 菅田茂昭 (訳) (2013) 一般言語学講義抄, 大学書林)
- [2] Saussure, F., (1916) *Cours de linguistique générale*, Payot. (ソシュール, F., 町田健 (訳) (2016) 新訳ソシュール一般言語学講義, 研究社)
- [3] Scherer, K. R., (2000) "A cross-cultural investigation of emotion inferences from voice and speech: implications for speech technology", *Proceedings, Sixth International Conference on Spoken Language Processing (ICSLP 2000)*, Vol. 2, pp. 379-382.
- [4] Sadanobu, T., (2006, December 1) "Attitudinal correlate of final-rise-fall intonation in Japanese" [Paper presentation], 4th Joint meeting of Acoustical society of America / Acoustical society of Japan, Honolulu, Hawaii, USA.
- [5] ドナ, E.・昇地崇明, (2010) "パラ言語情報にみられる異文化間の知覚の相違", コミュニケーション, どうする? どうなる?, ひつじ書房.
- [6] 杉藤美代子, (1992) "イントネーションの記号論", 文化言語学: その提言と建設, 三省堂.
- [7] 韓咬池, (2021) 現代日本語の母音の非語彙的な延伸が生起する状況について—実例における身体の動きに注目した考察—, 京都大学文学研究科修士論文.